

なお、釈読については奈良大学水野正好氏、奈良国立文化財研究所史料調査室の諸氏からのご教示を得た。

9 関係文献

松本啓子「山之内遺跡のまじない札」(勸大阪市文化財協会『葦火』三三 一九九一年)

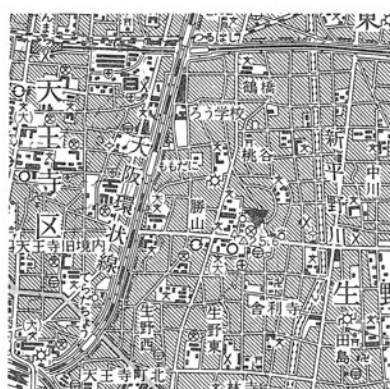
(松本啓子)



大阪・勝山遺跡 かつやま

- 1 所在地 大阪市生野区勝山北三丁目
- 2 調査期間 一九九〇年(平二)一〇月～一二月
- 3 発掘機関 勸大阪市文化財協会
- 4 調査担当者 高井健司・松本百合子
- 5 遺跡の種類 遺物包蔵地
- 6 遺跡の年代 縄文・江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

勝山遺跡は、大阪平野を南北に延びる上町台地の東縁にあり、御勝山古墳の北方に位置する。御勝山古墳では、周濠・造出し・葺石



(大阪東南部)

・埴輪が確認されており、築造年代は五世紀前半と考えられる。また、大坂夏の陣の際に徳川秀忠が岡山本陣を構えたことが知られており、当時の堀割も、古墳の西側で見つかっている。調査は古墳に関連する遺構の存在を予想し、後円部

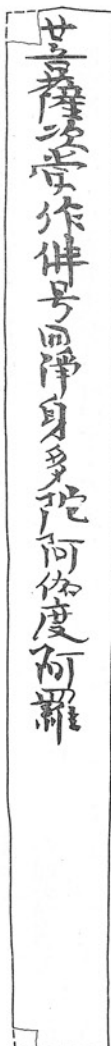
に向かって九m×一七mのトレンチを設定した。調査の結果、岡山本陣に関わるとみられる近世の深い堀割、中世に掘削された溝（木簡出土）、奈良時代の耕作痕跡、さらに最下層では粟津SZ式土器を含んだ縄文時代の流路が見つかった。遺物も、埴輪・須恵器・土師器・瓦器などが出土したが、古墳に直接関わる遺構は検出できなかった。

木簡が出土した溝は、トレンチ内ではほぼ東西方向に流れており、検出部の幅は約三・四m、深さは約一・五m、横断面はV字形である。溝内は、細粒砂・シルト・粘土からなる水成層が堆積しており、かつて水が流れていたことを示している。木簡は、底に近い部分の砂と粘土の境で見つかった。周辺の堆積土の状況から、他所から流れてきたものと考えられる。その他、瓦質羽釜・白磁碗・須恵器・土師器・埴輪が少量出土した。

8 木簡の积文・内容

- (1) 「菩薩次□作佛号回淨身多陀阿伽度阿羅」

305×31×0.5 011



非常に薄い桎目の板材を用い、先端をわずかに山形に切り取っている。文字に若干の異同はあるが、『妙法蓮華經』序品第一の一句を記したものである。ただし、八字目の「日」を「回」としている。『法華經』の柿板材書写は、平安時代以降に貴族の間で流行し、水辺に流した例も見られる。本例も、そうした一例といえるかもしれない。

なお、釈読には鳥居信子氏の協力を得た。

9 関係文献

松本百合子「はじめまして勝山遺跡です」(大阪市文化財協会『葦火』三一 一九九一年)

(松本百合子)